

シテ大ナリ、即本草彙言ノ象山貝母ナリ、  
 又和産ノ貝母アリ、深山幽谷ニ生ズ、高サ僅ニ五六寸、苗葉ノ形小葉ノ貝母ニ似テ細小ナリ、莖葉  
 共ニ茶色ヲ帶ブ、二三月花ヲ開ク、ソノ花必ズ横ニ向フテ倒垂セズ、根ノ形相似テ小ナリ、四月ニ  
 至テ苗葉共ニ枯ル、阿州深山ニ産ス、

〔草木育種後編下品〕貝母本草 和名は、くり和名抄 一名おひ鏡俗にはるゆりといふ、早春より芽を

出し、二月の比花を開く、畦を作り秋月糞汁を澆ぎ置て冬月根を堀り出し、大なるを製し、小なる  
 は畦へ植べし、此品享保九年三月唐山より始めて日本へ獻せし時、御醫師へも鑒定を命せられ  
 たれども知れず、翁の門人植村某をして將翁先生部阿に審定せしむ、翁是は貝母なりと云、官始

めて舶來の品よく審定せりとて、即其生根を賜はり培養せしむ、以後本邦に此藥ありて、當今隨  
 地養ふて、或は早春の插花にも用ゆ、

〔剪花翁傳正月開花〕貝母 花小さく、色緑み黄み白み相和せしごとくにて、赤黒き鹿の子の斑入

なり、開花正月上旬、方三步陰、花のためには日向よし、されど夏月旱を厭へり、地一步濕土塵土、肥  
 淡小便、水七歩にして寒中まで澆ぐべし、入寒より油脂を少し入てよし、分株移十月よし、

〔延喜式三十七〕諸國進年料雜藥

美濃國六十二種、略中 貝母三斤、

〔書言字考節用集六〕金燈花山慈姑 又作山茨菰時珍云、葉如水仙而、金燈草又云、無

〔和爾雅七〕山慈姑鹿蹄草並同、

〔大和本草九〕山慈姑 若水云、今多以鐵色箭及石蒜爲山慈姑、俱非是、

カタコ 高二尺許莖紫色葉面ニ有黒點、花カザグルマノ如シ、紫色ナリ、比叡山ニアリ、正月ノ末

開花尤美、根ノ形芋ノ如ク、又蓮根ノ如シ、若水云、本草紫參下ニ出タル早藕ナルベシ、其粉如米味

山慈姑